

教師の自律性支援と生徒の英語学習に対する動機づけとの関連性 —習熟度の低い生徒に関するケーススタディ—

井上 萌

(京都教育大学大学院連合教職実践研究科 大学院生)

The Relationship Between Teachers' Communication Styles and Students' Motivation —A Case Study on Low Proficiency Students—

Moe INOUE

2024年9月30日受理

抄録：本研究の目的は、教師による自律性支援と生徒の英語学習における関係性を明らかにすることである。公立高等学校に在籍する高校1年生215名を対象に、英語学習に関する意識調査を実施した。調査結果の分析により、生徒の授業への動機づけの内在化を予測する要因として、自律性、有能性、そして関係性の欲求充足が重要な役割を果たすことが示された。これらの結果から、高等学校の英語教育においては、生徒が安心して学習に取り組める環境の構築に加え、生徒の自律性や有能性を促進するための指導法を、教師が積極的に導入する必要性が示唆された。

キーワード：自立性支援、動機づけ、心理的三欲求

I. はじめに

近年、PISAなどの国際比較調査により、子供の学習意欲の低下が注目を浴びている。この状況に対処するため、文部科学省は新学習指導要領（2018年）で、「主体的・対話的で深い学び」に焦点を当て、これを深めるための方針を推進している。生徒が学習に興味関心を持ち、主体的に学習できるよう支援している。そのため、生徒が自らの成長のために学習できるよう、私たちは生徒の英語学習に対する内的調整を高め、自律的な学習者に成長させることが求められている。本稿では、一つのケーススタディとして、習熟度の低い生徒における教師の自律性支援が基本的心理欲求に及ぼす影響を検討し、それらの関係性が生徒の動機づけ（無調整を含む）に及ぼす影響についても論じる。

II. 先行研究

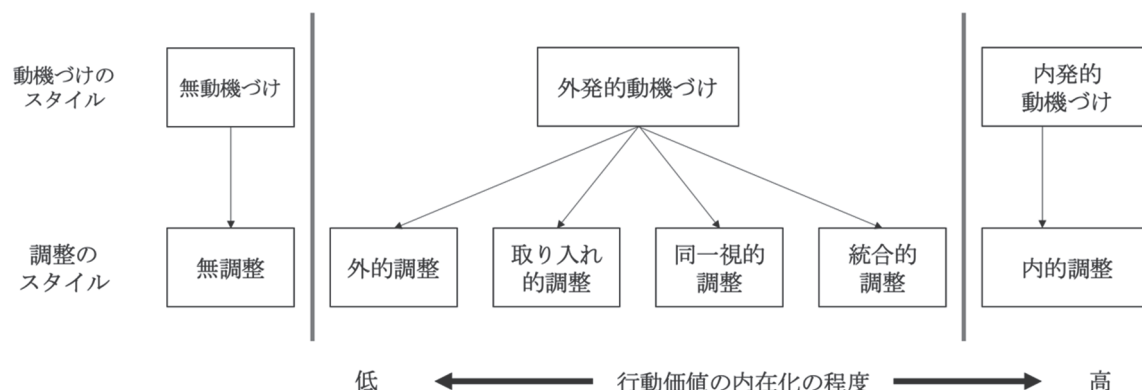
1. 動機づけ

心理学的に、『動機づけ』は行動や心の活動を開始し、方向づけ、維持し、調整する心理的なプロセスであるとされる（上淵, 2012）。動機には、日々変動する不安定な状況変数と、比較的安定した特性的な特性変数の2つの種類がある。本論文では、授業という状況によって値が変化する動機に焦点を当てる。

2. 有機統合理論

有機的統合理論は、自己決定理論のミニ理論であり、外発的動機づけの内在化の過程に関する理論である（櫻井, 2009）。有機的統合理論では、外発的動機づけを自律性の程度によって4つに分けて論じている。無調整、外発的動機づけ、内発的動機づけの違いは、行動価値の内在化の程度によるとされている（図1）。内在化の程度が低い順に、無調整、外的調整、取り入れ的調整、同一化的調整、統合的調整、内的調整となる（鹿毛, 2013）。内在化の程度が高いほど、自己決定性が高いとされている。

図 1. 動機づけスタイルと自己調整スタイルの内在化の程度(鹿毛, 2013 を基に作成)



3. 基本的心理欲求理論研究の目的

基本的心理欲求理論は、自己決定理論のミニ理論である。西村、櫻井（2015）によると、基本的心理欲求理論では、well-being に必要不可欠な構成要素として3つの基本的心理欲求に着目している。それらの基本的心理欲求とは、自律性、有能感、関係性である。そして、3つの基本的心理欲求が満たされると、価値観が「内在化」し、外発的だった動機づけが連続体によって内発的なものへと移行していくと考えられている（染谷, 2021）。それぞれの心理的欲求は以下の通りである。

(1) 自律性の欲求充足

自律性の欲求とは、行為を自ら起こそうという傾向性を指し、学習者が自律的に英語学習に取り組みたいと感じることを指す。

(2) 有能性の欲求充足

有能性の欲求とは、環境と効果的に関わりながら学んでいこうとする傾向性を指し、学習者が、英語ができるようになりたい、あるいは英語の授業内容を理解したいと感じることを指す。

(3) 関係性の欲求充足

関係性の欲求とは、他者やコミュニティと関わろうとする傾向性を指し、学習者が教師や仲間と、互いに協力的に英語学習に取り組みたいと感じることを指す。

4. 自立性支援と動機づけの関連性

Noels, Clement, and Pelletier (1999) では、カナダに住むフランス語学習者を対象に、教師のコミュニケーション・スタイル（自律支援の有無、情動的フィードバックの有無）や学習環境に対する学生の認知と、彼らの動機づけとの関連が調査された。（表 1）

表 1. 動機づけスタイルと教師及び学習環境に対する認知との関連性
(Noels, Clement, and Pelletier, 1999 を基に作成)

動機づけスタイル	教師		環境
	制御的	情報提供的	制御への認知
無調整	.08	-.03	.23*
外的調整	.07	.11	.02
取り入的調整	-.04	-.07	.13
同一視的調整	-.20	.21	-.45**

内的調整

-.23

.34**

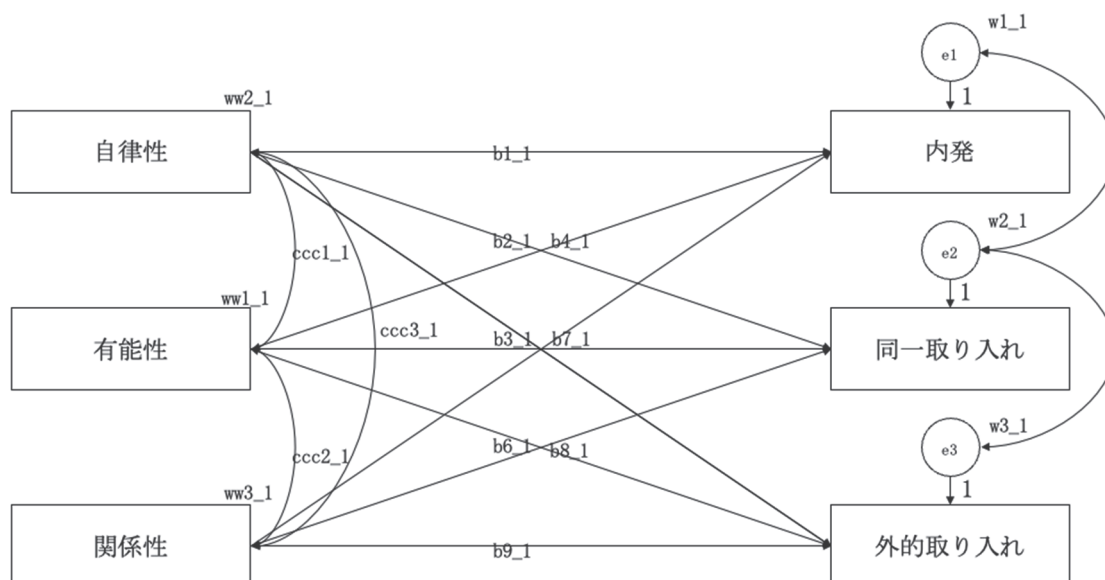
-.29**

学習者の内発的動機づけと教師のコミュニケーション・スタイルとの間には、中程度の相関が確認された。このことは、教師のコミュニケーション・スタイルが自律支援的、あるいは情報的なフィードバックを与えるほど、学習者の内発的動機づけが高まる傾向にあることを示すものである。一方、外発的動機づけとの間には、そのような関係は見られなかった。これは、外発的動機づけを持って学習に取り組んでいる学習者は、もうすでに何らかの目的や目標を持って学習に取り組んでいるため、内発的に動機づけられた学習者ほど教師の影響を受けない可能性を示唆するものである。

5. 基本的真理欲求理論と動機づけの関連性

カレイラ（2017）では、日本と韓国の小学校に在籍している英語学習者を対象に、心理的三欲求と動機づけの関係などの動機づけプロセスを比較する調査が行われた。その中で、自己決定理論に基づき心理的三欲求が動機づけに影響を与えるという仮説モデル（図 2）をもとにしたパス解析の結果、仮定したモデルの適合度がおおむね高かったことが確認された。

図 2. 心理的三欲求と動機づけの関係のモデル（カレイラ,2017 を基に作成）



Ⅲ. 研究の目的

本研究の目的は、教師の自律性支援と生徒の英語学習の関係性を明らかにすることにある。本研究の目標を達成するために自律性支援と基本的心理欲求、また、動機づけとの関連性を検討する。本研究では、無調整を含む動機づけの項目を取り入れ、それぞれの要素がどの程度関連しているか分析する。

Ⅳ. 研究の方法

1. 参加者と調査時期

本研究の参加者は京都府内の公立高校に所属する高校1年生 215 名であった。

アンケート結果よりこの高等学校の特徴としては、英語学習の重要性は感じているものの、生徒の英語授業及び学習への動機づけはそれほど高くない生徒の多い高等学校である。

2. アンケートについて

2023年11月に教科担当の教師により紙面を用いて実施された。アンケートを行う前に、教師より、アンケートの回答は成績に関係しないこと、回答は自由意志であり強制でないことが明示及び口頭で説明された。

アンケートは、5件法（とてもそう思う、思う、どちらでもない、思わない、全く思わない）を用いた40項目のアンケート用紙を用いて実施した。アンケート項目は、「内的調整」「同一視的調整」「取り入的調整」「外的調整」「無調整」「心理的欲求充足（自律性、有能感、関係性）」「自律性支援の認知」の9つの要素を含んでいた。動機づけスタイルに関する項目には学習風土尺度（Learning Climate Questionnaire）を用いた。LCQを基にして、日本の英語学習環境下における自律性支援（6項目）の質問を作成し使用した。心理的欲求充足（9項目）に関する項目は染谷（2020a, b）で開発された尺度を用いた。また、英語学習における動機づけ尺度には廣森（2006）を使用した。

3. データ分析

得られたデータはIBM SPSS Statisticsを用いて分析された。分析方法には、記述統計、クロンバック α 係数、探索的因子分析、相関係数、共分散構造モデリングによるパス解析（SEM）を用いた。

V. 結果

1. 記述統計

データの特徴や傾向を掴むために、記述統計を行った。その結果、「同一視的調整」の平均値は比較的高いが、「内的調整」の平均値はそれほど高くない。つまり、英語を学習する理由として、将来役に立つと考えていることや、英語話者への漠然とした憧れを抱いている生徒が多いことが分かる。その反面、英語学習自体に楽しさや興味深さを感じている生徒はそれほど多くないと言える。まとめると、本研究の参加者は、英語学習の重要性は感じているものの、生徒の英語授業及び学習への動機づけはそれほど高くない生徒が多いということができる。また、「関係性の欲求充足」や「自律性支援」の平均値が高いことから、生徒間や教師との関係性は概ね良好であると言える。

2. 信頼性係数

信頼性を検討するために、「内的調整」「同一視的調整」「取り入的調整」「外的調整」「無調整」「自律性の欲求充足」「有能性の欲求充足」「関係性の欲求充足」「自律性支援」の9つの概念に関して、クロンバック α 係数を算出した。「内的調整」「同一視的調整」「取り入的調整」「外的調整」「無調整」は、それぞれ5項目、「自律性の欲求充足」「有能性の欲求充足」「関係性の欲求充足」はそれぞれ3項目、「自律性支援」は6項目であった。クロンバックの α 係数は、信頼性の指標となる信頼性係数の1種で、心理尺度に使われた項目の回答にどの程度一貫性があるかを示す。通常、 α 係数が0.75以上であれば一貫性があると見なされる。今回の調査では、信頼性分析の結果、内的調整は $\alpha = .952$ 、同一視的調整は $\alpha = .911$ 、取り入的調整は $\alpha = .739$ 、外的調整は $\alpha = .717$ 、無調整は $\alpha = .899$ 、自律性の欲求充足は $\alpha = .825$ 、有能性の欲求充足は $\alpha = .945$ 、関係性の欲求充足は $\alpha = .867$ 、自律性支援は $\alpha = .938$ だった。

3. 探索的因子分析

信頼性係数の結果を基に、英語学習における動機づけ尺度（Q1-Q25）25項目を対象として探索的因子分析を行った。ここでは、主因子法・バリマックス回転を採用することとした。分析の結果、4つの因子を抽出することができた。廣森（外国語学習の動機づけを高める理論と実践）を基にした尺度、「内的調整」「同一視的調整」「取り入的調整」「外的調整」「無調整」の中の「取り入的調整」にあたる因子が存在しなかった。この結果

より、本来、「取り入的調整」にあたる Q11（先生にあなたは良い生徒だと思われたいから）、Q14（英語を勉強しなければ、気まずいと思うから）、Q15（英語くらいできるのは、普通だと思うから）が「外的調整」にあてはまっていた。このことから、英語を学習する理由において、他者（教師や社会）からの視点を重要視していないことがわかる。また、Q12（英語を勉強しておかないと、後で効果すると思うから）、Q13（英語で会話できると、なんとなく格好がいいから）が、「同一視的調整」に当てはまっていた。そのことから、将来のために学習すること、また漠然とした英語話者への憧れが自己の内部に受容され、個人的に重要なものとして認識されていることが判明した。さらに、本来「外的調整」にあたる Q19（英検などの資格を取りたいから）が「内的調整」に該当した。このことから、参加者は資格の取得に前向きな気持ちで取り組む生徒が多いことがわかる。

分析結果をもとに、「取り入的調整」を除く「内的調整」「同一視的調整」「外的調整」「無調整」の4つの因子に分類した。また、それぞれの因子の信頼性を検討するためにクロンバックの α 係数を算出した。4つの因子すべてが、 $\alpha > .75$ であり、高い信頼性を得ることができた。

4. 相関係数

「内的調整」「同一視的調整」「取り入的調整」「外的調整」「無調整」「自律性の欲求充足」「有能性の欲求充足」「関係性の欲求充足」及び「自律性支援」の関連性を論じるために、相関係数を算出した（表2）。3つの欲求充足及び「内的調整」、「同一視的調整」と正の相関があることが明らかになった。また、「自律性支援」と「無調整」の間には弱い負の相関があることが判明した。

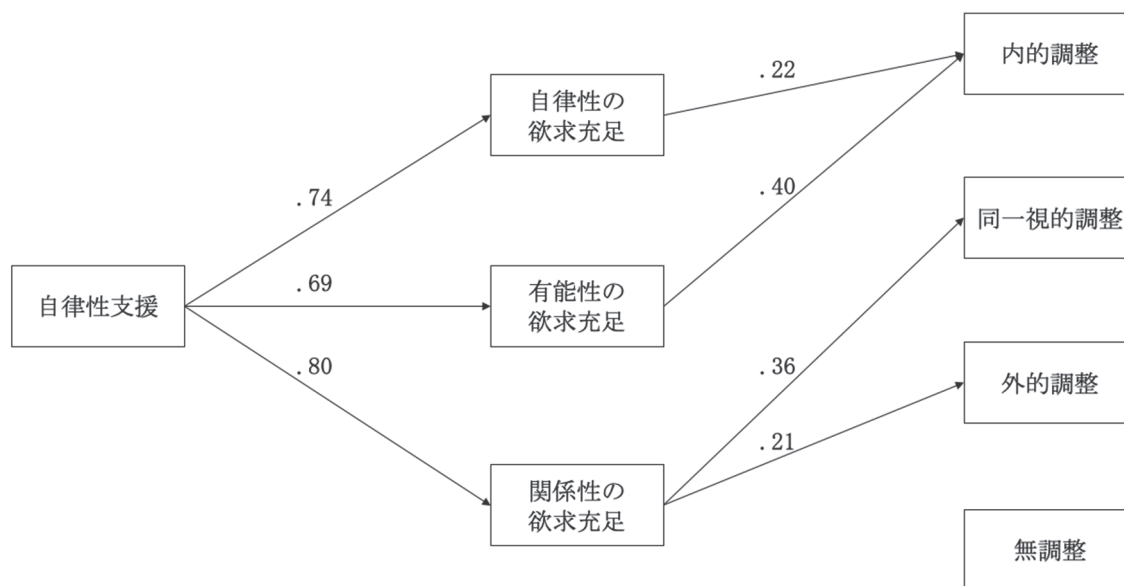
表 2. 8つの変数の相関係数

	1	2	3	4	5	6	7	8
1. 内的調整	-	.707**	.544**	-.433**	.613**	.688**	.598**	.508**
2. 同一視的調整		-	.455**	-.379**	.511**	.481**	.566**	.466**
3. 外的調整			-	-0.068	.317**	.341**	.398**	.353**
4. 無調整				-	-.294**	-.259**	-.285**	-.207**
5. 自律性の欲求充足					-	.702**	.781**	.737**
6. 有能性の欲求充足						-	.702**	.602**
7. 関係性の欲求充足							-	.776**
8. 自律性支援								-

5. 共分散構造分析によるパス解析（SEM）

自律性支援と動機づけの関係性を知るために、共分散構造分析によるパス解析（SEM）を行った。本研究では心理的三欲求が動機づけに影響を与えるという自己決定理論の仮説に基づいてモデルを作成し、飽和モデルで数値を算出した。その結果、Autonomy support から Need for autonomy への影響（ $p > .001 < .05$ ）、Autonomy support から Need for competence への影響（ $p > .001 < .05$ ）、Autonomy support から Need for relatedness への影響（ $p > .001 < .05$ ）、Need for autonomy から Intrinsic regulation への影響（ $p = .020 < .05$ ）、Need for competence から Intrinsic regulation への影響（ $p > .001 < .05$ ）、Need for relatedness から Identified regulation への影響（ $p > .001 < .05$ ）、Need for relatedness から External regulation の影響（ $p = .002 < .05$ ）が有意であることがわかった。有意ではなかったパスを削除したものが図3である。

図3. 自律性支援が三欲求の充足を媒介して動機づけに及ぼす影響



VI. 考察

本研究では高校1年性を対象に「教師のコミュニケーションスタイルと英語学習に対する動機づけの関連性」を調べるアンケート調査を実施した。今日、英語科の授業がより対話的な性質を帯びている一方で、全体授業の中で、英語での発話に苦手意識を持つ生徒も少なくない。このような背景より、生徒が英語を積極的に話したいと感じる環境を整えることが求められる。教師の適切な介入が生徒の英語学習への動機づけにどのように影響を与えるかを理解し、授業構成を考えることが重要である。自律性支援から心理的三欲求へのパス係数を見ると、「自律性支援→関係性の欲求充足」「自律性支援→有能性の欲求充足」「自律性支援→自律性の欲求充足」の順番に影響を与えやすいことがわかった。そして、心理的三欲求はそれぞれ「関係性の欲求充足→外的調整」「関係性の欲求充足→同一視的調整」「有能性の欲求充足→内的調整」「自律性の欲求充足→内的調整」に影響を与えていることがわかった。このことより、カレイラ松崎順子(2017)が指摘するように、日本の高校生を対象とした英語教育の中でも、生徒の授業に対する動機づけの内在化を予測する変数として、自律性・有能性・関係性の欲求充足が存在するということが明らかとなった。特に、有能性の欲求充足・自律性の欲求充足を高めていくことで、動機づけの内在化を向上させることができると考えられる。つまり、他者から学習を強制されていると感じる場合、英語学習に対する動機づけは期待できないことが明らかとなった。自発的に学習しているという感覚が重要であり、自己決定性を尊重することは、生徒の有能感と強く関連している。本研究の結果より、自律性の支援が生徒の基本的欲求を満たし、動機づけを向上させる上で重要な役割を果たすことが示唆される。

上記を総じて考えると、高等学校の英語授業においては、自律性支援が自律性・有能性・関係性の欲求充足を媒介し、動機づけを高めていくことを考慮する必要がある。したがって、生徒の自律性を高めるために、生徒が自ら学び自ら考える力を高める支援が必要である。生徒の自律性を支援するための具体的な方法として、以下のようなアプローチが挙げられる。まず、生徒に目標設定を促すことや、選択肢を提示すること、さらに共同学習を促進することが重要である。生徒が自ら目標を設定し、学習方法や課題を選択することで、達成に向けた計画を立てる力が育まれ、自発的な学習態度が促進される。また、生徒が有能感を感じるためには、フィードバックを重視し、自己評価を促すことが効果的である。正答や誤りの指摘だけでなく、学習過程に対するフィードバックを重視し、生徒が自身の進捗を実感できるようにすることが求められる。さらに、自己評価を定期的に行い、

学習の記録をスタディログとして残すことで、成長を可視化することも有効であると考えられる。

VII. 今後の課題と展望

本研究の限界として、調査対象が1校のみに限定されている点が挙げられる。そのため、結果を一般化するには、より多くの高校生を対象とした調査が必要である。また、量的調査は実施されているものの、質的調査に基づく実証研究が十分ではない点も課題である。教室内の状況をより精緻に理解するためには、質的調査手法を用いた実証的研究のさらなる展開が求められる。さらに、本研究はプロフィシエンシーの低い生徒を対象としたケース・スタディであり、一般的な高等学校の状況とは異なる可能性がある。したがって、今後は、多様な高校生からデータを収集し、分析を行っていくことが必要である。

また、本研究で明らかにした「教師のコミュニケーションスタイルと英語学習に対する動機づけの関連性」を基盤として、さらなる研究に発展させたいと考える。今後は、どのような教師のコミュニケーションスタイルが生徒の動機づけを高めるかについて研究し、より良い指導方法を追求していく。

謝辞

本論文の作成にあたり、適切な助言と丁寧なご指導を賜りました染谷准教授に心より感謝申し上げます。また、研究にご協力いただいた高校の先生方と生徒の皆様にも深く感謝いたします。最後に、常に建設的な議論と精神的な支えを与えてくれた研究室のメンバーにも心から感謝いたします。

参考文献

- Noels, K., Clément, R., & Pelletier, L. (1999). Perceptions of teachers' communicative style and students' intrinsic and extrinsic motivation. *The Modern Language Journal*, 83(1), 23-34.
- Reeve, J. (2018). *Understanding motivation and emotion* (7th edition). Hoboken, NJ: John Wiley & Sons, Inc.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2000). Self-determination theory and the facilitation of intrinsic motivation, social development, and well-being. *American Psychologist*, 55, 749-761.
- Ryan, R. M., & Deci, E. L. (2017). *Self-determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. Guilford Press.
- 上淵寿(編著). (2012). キーワード動機づけ心理学. 金子書房.
- 鹿毛雅治. (2013). 学習意欲の理論: 動機づけの教育心理学. 金子書房.
- カレイラ松崎順子. (2017). 日本と韓国の小学生の英語学習に対する心理的三欲求と動機づけ—自己決定理論の観点から—. *東アジア研究* (大阪経済法科大学アジア研究所), 66, 45-58.
- 国立教育政策研究所. (2019). *OECD 生徒の学習到達度調査 (PISA) ～2018 年調査国際結果の要約～*.
<<https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/>> (参照日 2024 年 11 月 22 日)
- 櫻井茂男. (2009). 自ら学ぶ意欲の心理学: キャリア発達の視点を加えて. 有斐閣.
- 染谷藤重. (2020a). 高校生の英語における基本的欲求充足尺度の作成の予備調査: 内発的動機づけに及ぼす影響. *上越教育大学教職大学院研究紀要*, 7, 45-54.
- 染谷藤重. (2020b). 小学生の英語授業動機づけが内発的動機づけに及ぼす影響: 基本的欲求充足及び阻害に焦点を置いて. *上越教育大学研究紀要*, 40(1), 227-234.
- 染谷藤重. (2021a). 高校生の英語授業への動機づけと英語学習者へのエンゲージメントとの関連性の検証: SGH 指定校に関するケース・スタディ. *外国語教育研究*, No. 24, 66-79.
- 染谷藤重. (2021b). 英語授業者の動機づけスタイルが学習者の内発的動機づけに及ぼす影響: 自己決定理論を用いたアプローチ. *中部地区英語教育学会紀要*, 50, 221-226.
- 西村多久磨・櫻井茂男. (2015). 中学生における基本的心理欲求とスクール・モラルとの関連: 学校場面におけ

- る基本的心理欲求充足尺度の作成. パーソナリティ研究, 24(2), 124-136.
- 廣森友人. (2006). 外国語学習者の動機づけを高める理論と実践. 多賀出版.
- 文部科学省. (2018). 高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説: 総則編.
<https://www.mext.go.jp/content/20211102-mxt_kyoiku02-100002620_1.pdf> (参照日 2024 年 11 月 22 日)